アーディ・シャンカラーチャーリヤの生涯と教え
第2部
ジョエル・デュボワによる解説

シッダ・ヨーガの道では、バーバ・ムクターナンダが、南インドのフブリにあるシッダルーダ・スワーミのアーシュラムで、彼の最初の指導者たちからアーディ・シャンカラーチャーリヤのヴェーダーンタの教えを深く吸収しました。その後、バーバはそれらの教えを、長年にわたって世界中で教えた彼自身の講話に織り込みました。グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダは、私たちは私たちが求めるゴールそのものである、という根本的な教えに、シッダ・ヨーガの生徒たちの注意を繰り返し向けさせてきました。バーバもグルマーイも、マントラ、ソーハム（私はそれである）を繰り返すことによってそれらの真実を吸収するよう探究者たちを導いてきました。このようにシャンカラの教えは今日まで、シャンカラ自身の弟子たちや後続の世代の追随者たち――私たちが現在よりどころにしている師たち――によって伝えられてきました。

討論と最初の弟子

シャンカラについての卓越した伝記、『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』は、当時の多くのブラーミンの教師たちと討論したこの偉大な師について描写しています。そこには、『ヴェーダーンタ・スートラ』の著者である賢人ヴィヤーサと、シャンカラのグルのグルであるガウダパーダも含まれています。両者は、自分たちの著作に関するシャンカラの解説について彼に問うために、精妙な次元から現れた末、満足したと宣言しました。ヴィヤーサはまた、当時まだ 16 歳だったシャンカラに、さらに 16 年間、インド中に教えを広めることを許可したと伝えられています。

この伝記作家によると、シャンカラはまた、ヴェーダの理解を異にする当時生きていた多くの学者たちとも討論をしました。その中でも特に注目されたのが、ヴェーダの儀式師であるマンダナ・ミシュラです。シャンカラの彼との対面は、『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』の中心的な3章を占めています。マンダナにとって、ヴェーダは何よりもまず、ヤグニャとブラーミンの儀式について教えてくれるものです。ブラーミンはブラフマン――あらゆるものの源と支えである大いな

る自己――を、この解説の第1部で説明したウパーサナ（専心）の実践を通して知り得ます。例えばウパニシャッドが示すように、儀式の中で出合う物や自然の要素を神聖な存在として想像することを通して。しかしマンダナにとっては、儀式以外にブラフマンを知る独立した手段はありません。

シャンカラが、マンダナや他の学者たちと直接討論したかどうかはともかく、現代まで何千年にもわたり、ブラーミンたちは伝統的な教えに対する異論には決起して集まり、反論してきました。そしてシャンカラの解説は、そのような白熱したやりとりが、しばしば劇的に繰り広げられたことを描写しています。シャンカラの解説は、その原文に儀式が取り上げられている時は必ず、マンダナの見解を述べ、それに対して繰り返し断固として異議を唱えています。シャンカラは、ウパニシャッドの偉大な声明はヴェーダの儀式とは関係なく、探究者を覚醒させる力を持つ独立したマントラであると力説しています。同じように、シッダ・ヨーガのグルたちは、弟子たちに大いなる自己を知る力をつけさせるために、儀式とは無関係の独立した力を持つ、恩恵で活性化されたマントラを与えます。

マンダナの見解は、シャンカラが教えていた8世紀のブラーミンの社会では主流でした。しかし、その後数世紀の間に、シャンカラの見解がより正確であると広く認識されるようになりました。『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』ではこの重要な転換を、マンダナの妻が司会を務める討論会でマンダナが敗北し、その妻は洞察力と学問の女神サラスワティーの化身であることが判明したと表現して、劇的に描写しています。この物語で、討論に負けた後、マンダナはサンニヤーシンの誓いを立て、シャンカラの最高位の弟子スレーシュワラとなります。マンダナとスレーシュワラは恐らく異なる時代に別の場所で生きたようですが、この描写は、８世紀のブラーミンの社会におけるヴェーダの儀式を優先する世界観から、儀式をブラフマンの本質へのより高度な洞察のための付属品と見なす世界観に、比較的速やかに転換したことを強調しています。

スレーシュワラの『ナイシュカルミヤ・シッディ』は、マンダナに関連のある古い視点をさまざまな角度から直接引用し、シャンカラ と同様に徹底的に反論しています。スレーシュワラはまた、

『ブリハダーラニヤカ・ウパニシャッド』と『タイッティリーヤ・ウパニシャッド』に関するシャンカラの解説について、要約も書きました。それは、すでに膨大な長さだったシャンカラの原著のさらに数倍の長さで、それらのシャンカラの著作がとりわけ研究に値するものであることを示しています。

教えの伝道と後の弟子たち

スレーシュワラの他に、伝記作家たちは、シャンカラの弟子で、自ら解説書を書いてグルの教えを広めることに貢献した2人のブラーミンの名前を挙げています。パドマパーダとトータカは、シャンカラを「カーラ（時間）のあらゆる痕跡を消し去った」者[1]、自身が「知識の輝ける太陽の光」である者[2]、としてたたえています。パドマパーダとトータカは両者とも、シャンカラの『ヴェーダーンタ・スートラ』の解説の各側面を解明し、研究しました。

スレーシュワラが儀式や討論の訓練を受け、熟達した専門家であったのに対し、パドマパーダは、あらゆる執着を捨てて解放を遂げたいという切望によってブラフマンの洞察を得たと伝えられています。パドマパーダは、ヴァーラーナシに滞在していたシャンカラに最初に近づいた人物で、この弟子はそこでシャンカラに即座にサンニヤーサへの伝授を受けました。『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』には、パドマパーダ（蓮花（れんか）の足）と名付けられた由来が説明されています。シャンカラがガンジス川の向こう側からパドマパーダを呼んだ時、パドマパーダは彼を支えるために次々と現れた蓮花の上を歩いて水面を渡り、師への完全な信頼を実証しました。この物語の真偽はともかくとして、『ヴェーダーンタ・スートラ』の最初の四つの格言についてのシャンカラの解説をパドマパーダが解明したことは、シャンカラの教えをひたむきに信じていることを表しています。

一方、トータカは、控えめにシャンカラに仕えることで学術的な解説の能力を得たと言われています。『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』は、シャンカラの弟子の一人がトータカを愚か者として軽蔑した時、シャンカラがトータカの中にすべてのヴェーダの主題に関する知識を自然に目覚めさせ、そしてトータカは複雑なトータカ韻律で献身と教えの詩節を発し始めたと語ってい

ます。ウッダーラカの偉大な言明「あなたはそれである」に焦点を当てたトータカ自身によるヴェーダーンタの本質の要約には、トータカは師と生徒たちのやりとりに謙虚に耳を傾けることによって着想を得たと、そして「それはシュルティ(ヴェーダを『聞くこと』)そのもののようであった」[3]、と説明されています。

『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』は、ハスタマラカという名前の4番目の弟子について述べています。その父親はシャンカラの前に口の利けない7歳の子どもを連れて来て、少年の愚かさを訴えたと伝えられています。シャンカラが少年に会った喜びを表すと、ハスタマラカは立ち上がって 12 の詩節を口にし、自分は「自ら目覚めた者」(ニジャボーダ)であると明らかにしました。これらの詩節は、今日でも『ハスタマラカ・ストートラ』として通用しています。シャンカラは、現在この賛歌[4]と共に伝えられている解説を書いたと思われます。 別の弟子は後に、ハスタマラカがヴェーダーンタ全体を把握しているのは、果汁豊かでその薬効で知られるアマラカの実を手のひらに持っているようなものであると述べて、「手の中の果物」(ハスタ)という彼の名前を説明しました。そして、『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』は、ハスタマラカはブラフマンの意識に没頭し、複雑な解説に興味を示さなかったので、彼に執筆を依頼すべきではないと、シャンカラが言ったと記録しています。ハスタマラカの詩節についての解説は、シャンカラが正式な訓練の仕組みの外で洞察を得た人々を容易に受け入れ、たたえたことを示唆しています。シッダ・ヨーガの道では、バガヴァーン・ニッティヤーナンダは自ら目覚めた賢人のこの理想を体現しています。

教授法と生徒とのやりとり

シャンカラ自身は、『ウパデーシャサハスリー(千の教え)』の中で、師と弟子の間の2種類の直接的なやりとりを鮮やかに描写しており、これは恐らくシャンカラと生徒とのさまざまなやりとりを特徴付けています。1番目は、「あなたはそれである」や「〜ではない、〜ではない」[5]など、重要なウパニシャッドの一節の学習を通してサンニヤーシンを導くための一連の指示です。弟子がこれらを学び、解放への切望の兆候を示すと、師は「あなたは誰か?」と尋ね、生徒の真の姿を指し示す徐々に微妙になっていく言明を通して生徒を導きます。[6] この例は、シャンカラのカリ

スマ性に引きつけられるも、彼が教えたことを完全に理解する準備ができておらず、より高い洞察を得るために段階的な指示を必要としていた者もいたことを示唆しています。この最初のシナリオは、多くのシッダ・ヨーガの生徒のシナリオに間違いなく似ています。彼らはグルの段階的な教えに頼っていますが、サンニヤーシンの正式な誓いを立てた人は比較的少数です。

一方、『ウパデーシャサハスリー』に記述されている2番目の生徒と師のやりとりは、一部の生徒は既に解放への情熱に燃えており、ヴェーダーンタの教えが深く染み込んでいる可能性があることを示唆しています。そのやりとりの中で、すべてのヴェーダーンタの教えの意味を既に学習し、吸収したように見える禁欲しているヴェーダの生徒は、「ブラフマンの洞察に恵まれた人」に差し迫った質問を持って近づきます。「どうしたら覚醒および夢の状態の中で経験する痛みから解放されますか。この痛みの原因は何で、どのようにそれを取り除くことができますか」。このやりとりでは、師は大いなる自己の性質について詳細に考察し、疑問を取り除く過程を通して生徒を導きます。その最後では、生徒は自分自身の言葉で純粋な意識としての大いなる自己の認識を表現し、師はそれを確認します。[7] 興味深いことに、この禁欲しているヴェーダの生徒は聞いたことの意味を非常に深く積極的に探究し、師とサンニヤーシンのやりとりの3倍の時間続く真の会話を引き起こしました。実際、彼の解説の著作の中でシャンカラは、ブラフマン(ブラフマ・ヴィディヤー)への深い洞察を達成するために役立つ一つの可能性としてサンニヤーシンの誓いを立てることを説明していますが、多くの人にとっては、それは単にその洞察の達成を示す最後の段階だろうと彼は認めています。興味深いことに、『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』は、トータカやハスタマラカがサンニヤーシンになることについては言及しておらず、彼らは単に禁欲している生徒として師に仕え、彼ら自身教えていたことも暗示しています。

シャンカラの遺産とこの世界からの旅立ち

シャンカラの直弟子たち、そして 14 世紀の『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』は、シャンカラを主に師として記述しています。しかし、時がたつにつれて、シャンカラのヴェーダーンタの教えと彼の弟子たちによって推進された実践は、サンニヤーシンの系譜を組織するために使用される学習と行動の基準となり、比喩的に言えば、(今日の多くの人が言うように)シャンカラがそれ

らの系譜を設立したと言うことができます。第2千年紀半ばまでに、シャンカラのヴェーダーンタに関連するサンニヤーシン僧団は、ダシャナーミ(10 の名前)僧団として知られており、その名前のほとんどは、ギリ(山)、アーラニヤ(森)、サーガラ(海)、ティールタ(渡河)など、サンニヤーシンが放浪した自然の要素に関連しています。グルマーイとバーバはサンニヤーシンのサラスワティー僧団に属し、その系譜はシャンカラにまでさかのぼります。シッダ・ヨーガのスワーミたちもこの僧団に属しています。

ブラーミンの家長たちもヴェーダの生徒たちも、同じようにシャンカラの教えに興味を持っていました。シャンカラが、ヤグニャやその他のヴェーダの儀式との関連性を離れてウパニシャッドの声明の力を強調したように、シャンカラのヴェーダーンタの教えを支持するブラーミンたちは、そうした儀式とは別の独自の伝統を発展させました。従って、シャンカラは、そうしたブラーミンの伝統の比喩的な創始者または改革者として見なされることもあり、その支持者たちはスムルティ(記憶)――ヴェーダの儀式や朗唱とは別に伝えられる教え、伝説、献身の伝統――に焦点を置くことから、スマールタ・ブラーミンとして知られるようになりました。スマールタ・ブラーミンは自分たちの系譜のヴェーダを暗記してもいましたが、彼らはヴィシュヌ、シヴァ、女神やその他の神々を崇拝することを実践に取り入れました。

シャンカラに続くその後の数世紀で、シャンカラの系譜を主導した師たちは、「洞察の座」(ヴィディヤー・ピータ)とも呼ばれる多くの学問センター(マタ)を設立しました。そこで生徒たち――家長もサンニヤーシンも――はシャンカラの教えを学び、伝えました。これらのグルの多くは、アビナヴァ・シャンカラ(新しいシャンカラ)またはシャンカラーチャーリヤ(シャンカラの伝統の師)として知られていました。英国によるインド統治時代までに、学問センターを支持するスマールタ・ブラーミンたちは、主要な巡礼地にある重要な寺院近くの各方位に一つずつ設置されている四つの学問センターを、最重要と見なすようになりました。現在それぞれが以下のように、4人の主要な弟子と4種類のヴェーダのうちの一つに関連付けられるようになっています。

- 東:オリッサ州のプリー・マタ、パドマパーダと『リグ・ヴェーダ』に関連

- 北：ウッタラーカンド州のジョーティル・マタ、トータカと『アタルヴァ・ヴェーダ』に関連
- 西：グジャラート州のドワールカー・マタ、ハスタマラカと『サーマ・ヴェーダ』に関連
- 南：カルナータカ州のシュリンゲーリ・マタ、スレーシュワラと『ヤジュル・ヴェーダ』に関連

今日、一部のスマールタ・ブラーミンは、タミル・ナードゥ州カーンチに5番目のマタを認め、そのシャンカラーチャーリヤたちも同様に、現代に広く影響を及ぼしています。

この進化の後期に、『ヴィヴェーカ・チュダーマニ』や『アートマ・ボーダ』などのシャンカラのヴェーダーンタの教えを要約したものが、ヴェーダーンタの学問センターの学生たちや、それを支えるサマールタ・ブラーミンのコミュニティーの間で広まり始めました。解放を切望する生徒に対する慈悲深い師の応答という枠組みでしばしば語られるこれらの要約は、ヴェーダの集中的な研究を経験していない生徒にとって、重ね合わせとその停止についてシャンカラの教えを介して分析することによって、ウパニシャッドの賢人たちの偉大な声明を、理解しやすいものにしました。ヨーロッパやインドの学者たちは共に、そのような著作に見られる形式や概念は後のシャンカラーチャーリヤたちのそれに近いと指摘していますが、今日、これらのヴェーダーンタの著作は、アーディ・シャンカラによるものだと一般的に考えられています。

同様に、8世紀のシャンカラによるものと現在では考えられており、特に後のシャンカラーチャーリヤたちに称賛されたさまざまな神にささげられる献身の賛歌もまた、ヴェーダーンタの伝統が広まるにつれて広く流布しました。「バジャ・ゴーヴィンダム」や「グロール・アシュタカム」のような賛歌は、この世界の物事に執着しないことを培うための献身の重要性を強調しています。他にも、「アンナプールナ・ストートラム」や「シヴァ・マーナサ・プージャー」などは、スマールターのコミュニティーで一般的に崇拝されている神々をたたえるものです。さらに、「ニルヴァーナーシュタカム」などは、大いなる自己、すなわちブラフマンと崇拝者の同一性を、「私はシヴァである、私はシヴァである！」という力強い繰り返しで伝えています。これらの賛歌は、シッダ・ヨーガのサッツァングで折に触れて歌われます。

シャンカラ の伝記作家たちは、この偉大なヴェーダーンタの師がどのように生涯を終えたかについて、さまざまな記述をしています。『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』には、シャンカラは思想の異なる学派の代表者と最後の討論をした後、サルワグニャ・ピータ（全知の座）を得て、その後ヒマラヤ山脈に登り、賢者や神々が天空の馬車で降りて来て、彼を天まで連れて帰った、と書かれています。他の伝記作家は、シャンカラは南インドに帰り、有名な寺院で神と融合したと言い、また別の伝記作家は、彼は旅を続けたとだけ記しています。どのような形であれ、シャンカラは生涯をかけて研究してきたウパニシャッドの真実に全身全霊を込めて没頭し、これまでもそしてこれからも存在し続ける大いなる実在に融合して生涯を終えたに違いないと思われます。

私たち、シッダ・ヨーガのグルの教えを学ぶ生徒にとって、この解説の締めくくりに当たり、より切実な問いはこうです。「私たちに伝えられたヴェーダーンタの偉大な真実を、聴き、考え、ひたすら集中するように、というシャンカラの励ましに、私たちはどう応えればいいのだろうか？」

第1部を読むにはここをクリックしてください

© 2023 SYDA Foundation®. 著作権所有。

---

[1] *Pañcapādika*, v. 3; translated by Rājasevāsakta D. Venkataramiah, *The Pañcapādika of Padmapāda* (Baroda: Oriental Institute, 1948), accessed August 12, 2022, https://archive.org/details/Panchapadika.of.Padmapada.In.English/page/n45/mode/2up.

[2] Toṭakācārya's *Toṭakāṣṭakam*, v. 6; accessed August 12, 2022, https://shlokam.org/totakastakam/; English translation © 2022 SYDA Foundation®.

[3] *Toṭakāṣṭakam*, v. 175; translated by Michael Comans, *Extracting the Essence of Śruti: The Śrutsarasamuddharṇam of Toṭakācārya* (Delhi: Motilal Banarsidass, 1996).

[4] *Hastamalaka Stotram*, accessed August 12, 2022, https://sanskritdocuments.org/doc_yoga/hastaam.html; English translation © 2022 SYDA Foundation®.

[5] Regarding the blanks in the second statement, see Part I

[6] *Upadeśasahasrī* II.1; translated by Sengaku Mayeda, *A Thousand Teachings: The Upadeśasahasrī of Śaṅkara* (Albany: SUNY Press, 1992), p. 211–27.

[7] *Upadeśasahasrī* II.2, Mayeda, *A Thousand Teachings*, p. 234–48.